休校要請1年 作文で読む子どもの心

コロナ禍を受け、政府が全国一斉休校を要請してからきょうで1年。友だちと会えないしんどさや再会の喜び。息の詰まる日々の暮らしと、それゆえに実感する家族との楽しい時間。全国の子どもたちの作文を通じて、この1年を振り返ってみる。

全国の教師らで作る定期誌「作文と教育」（日本作文の会編、本の泉社）は、子どもたちがつづり、クラスで読み合った作文の数々を掲載。この間、「子どもたちとコロナ」をテーマに度々、特集を組んできた。

「作文と教育」2・3月号

ねむれない。心の中で「みんなに、会いたいなー。」

ねむれない。どうしてだろう　心の中で思った。「みんなに、会いたいなー。」

休校中にこう書いた東京都練馬区立大泉第四小学校3年の佐藤希咲さん。お母さんに背中を優しくたたいてもらい、眠りに落ちる。

気が付くと、朝になっていた。「あ～あぁ。」起きてゲームをしながらさけんだ。「学校より、東京オリンピックの方がきけんじゃないかー!! 東京オリンピックは、海外からくるけど、学校は日本だけじゃないかー!!」さけんだら、いがいとスッキリした。

ステイホーム「お父さんがいたので楽しかった」

コロナ禍でも、全てが嫌なことばかりではない。長野市立古里小学校5年の中村風士朗さんの「ゴールデンウィークのお父さん」。

毎日近くの神社でキャッチボールをしてくれました。（略）コロナのせいでステイホームなので、会社も休みが多くなって、仕事の日も早く帰ってきます。（略）どこにも行けなかったけども、お父さんがいたので楽しかったです。

そして高知市立一ツ橋小学校5年の遠藤大賀さん。

「ソーシャルディスタンス」と、ぼくがお母さんに言うと、お母さんは、引っついてきます。ぼくが、「みつみつみつ!!」と言うと、お母さんはチューをします。やっぱり好きなんでしょうか？　ぼくのこと。

6月には都市部でも学校が再開した。東京都東久留米市立第三小学校4年、肥田木彩音さんは、分散登校が始まった喜びを書いた。

どうしてもまってられなくて、ずっと時計を見ていました。（略）「いってきまーす！」「バタン！」と、ドアをしめ、元気よく通学ろを通っていきました。学校につきました。みんながまっていました。時間になって、くつをぬぎ、上ばきをはきました。（ワクワク）

夏には集団感染が起きた高校や大学に、誹謗中傷の電話が相次いだ。SNSでも感染者を特定し攻撃する動きがあった。こうした大人の行動が子どもにどう影響するのか。宮城県の小学5年の女子児童の作文がそれを映している。

私は、コロナで死ぬことより、感染した後にいろいろ言われるんじゃないかということが心配です。（略）ひどいことを言われたら傷つくし、悲しくなるから言わないでいようと思うけれど、そんなことを言ってしまうかもしれません。正直、どんなふうになるのか全然分からないです。

教師らの現場報告も毎号、数多く紹介されている。広島県の公立小学校教諭、寺本透さん(27)はこんな葛藤をつづった。

みんなが楽しみにしている給食時間がやってきた。（略）配膳中に声を掛け合っていると、廊下を歩いていた先生に注意された。「給食中にどこの誰がしゃべっとるんか！」（略）

「黙食」「黙掃（黙って掃除）」「黙動」……。教師という職業に求められるものは、決まったことを決められたように行う忠実さなのだろうか。だけど、その価値観の中では、子どもたちが豊かにたくましく育っていく姿は見えてこない気がする。

「作文と教育」への問い合わせは同会へメール（sakubun@nifty.com）で。（宮崎亮）